



# 最期の審判

---

---

千職丈二

---

\*

信号が赤から青へと変わる。信号待ちをしていた皆が勢いよく横断歩道を歩いて行く。

僕も皆に習って勢いよく道路の向こう側へと進むが、ふ、と何かを感じて、スクランブル交差点の真ん中で立ち止まった。

「……これは？」

僕の肩に乗っていたのは真っ白で大きな羽根だった。

鳩なんだろう。

どういう訳だか一瞬だけ天使の映像が浮かんできたけれど、そんなものは信じていない。

僕は色々な悪いことをやってきた。あえてどんなことをやってきたのか語るつもりはない。それはどう話したとしても、自慢か同情を買うような話となってしまうからだ。どちらも本意じゃない。僕がやってきたことは間違っていたかもしれない。どこかで道を間違えたり踏み外したりしたのかもしれない。それでも、それでも僕は決して、僕が僕であることを見失っていない。どんなに悪いことをしたって、何をやったって僕は僕だ。誰に批判されて、誰に間違っていると言われたとしても——僕が自分で決めたんだ。世界中から非難されてたとえ殺されたとしても、僕は僕を貫きたい。

信号が赤になる。僕は向こう側へ行くのに間に合わず、赤信号を無視して半分ほどを渡る。クラクションを鳴らされるけれど、じゃあ、ここに留まっていたら良かったのか、という話だ。誰かが僕を轢いたら、ここに留まらせたやつは責任が取れるのだろうか。

正義は時に相対的だ。

僕はたとえ神様に殺されようが、天使が殺しに来ようが、自分が本当に正しいと思ったことを貫く。いつだって殺しに来やがれ。

\*

あの男の勘の鋭さは凄まじい。

私は天からの使いだ。主の意志に基づいて命令を実行するだけの存在である。意識はあるが意志はない。人間の目に映らず、聴こえない存在だ。

ところが、この男はそれを感知した。本来なら今のスクランブル交差点を渡り切ることができない予定だったのだ。私の力によって自動車に轢かれて死亡するはずだった。

しかし——

神が物理法則を超えたものだとするなら、私たち天使は物理法則そのものだ。人間が何も使わずに空を飛ぶことができないように、何もないことには私たちの力に抗うことはできない。

次の信号で決める。信号の上に止まると、向こう側の信号に黒い影が留まっていることに気づいた。

あれは——悪魔か。

あいつの力でさっきの術を免れたのか。

どうする？

このままじゃイタチごっこだ。

\*

やけに世界が慌ただしく感じる。まるで自分を中心にして風が渦巻いているような錯覚に陥る。  
何か起きる。間違いない。この信号を渡りきれるかどうか、僕の人生の全てを左右するような気がする。

この歳になって中二病みたいなことを――  
なぜか心臓が高鳴る。緊張で汗が出始める。  
じゃあ、失敗したらどうなるんだ。

死ぬ。

死にたくない。そりゃ、まず何より死にたいとは思わない。でも、死んでもいい時だってある。今はそんな人に出会っていないけれど、死んでも守りたい人だって見つかるかもしれない。あるいは今はそう思っていないだけで誰かの為になら死ぬことができるかもしれない。

そう考えたからという訳じゃないだろう。

うん、ごちゃごちゃと考えることは性に合わない。僕は僕を貫くだけだ。たとえその結果が死だと言うんなら、それは甘んじて受け入れる。

僕は僕をするだけだ。

そう考えたら落ち着いてきた。  
信号が青になる――

\*

――何も起こらない。あと五歩ほどで信号を渡り切ることができる。ただの杞憂だったということなんだろう。

そう安堵した瞬間だった。

「ひったくり！ 鞆返して！」

後ろからそんなお婆さんの声が聞こえてきた。

白昼堂々と、気が狂っているやつがいるもんだ。

女性のハンドバックを持った男がこっちへと向かってくる。

ナイフなんか持っていやがる。

しかも鞆を肩にかけて、ナイフを両手持ちにして僕に突進してくる。

これは死ぬかもしれん。

ちっ、しょうがない。

右腕の渾身のストレートを放つと、窃盗犯にクリーンヒットし、僕は無傷のまま倒れた男の上

に座り込む。

「がっ、げほっ……」

「突進された時は流石に死ぬかと思ったけれど、弱くて助かったわ」

「くっ……」

窃盗犯は悔しそうに呟いた。

誰か通報してくれたんだろう。パトカーの音が聞こえてくる。

僕は転がっていたナイフを拾い上げた。

パトカーが止まって警察官が降りてくると、銃口を僕に向けて叫ぶ。

「やめろ！ 撃つぞ！」

は？

いや、やめろも何も、何もしてないぞ、俺は。

僕が睨みつけると、警察官たちは勘違いしたままパトカーで道を占領して動かない。

「おい！ ふざけてんじゃねえぞ！ 僕は……」

「その人は犯人じゃありません！」

老婆が声を上げてくれた。

「犯人はその下にいる人……危ないっ！」

その声が僕に向けられているということを感じしてから一秒もかかることなくこの場にいることの危険性に気づき、少しでも衝撃を殺すことを考えて飛び上がったんだけど、元々座っていたということが仇となってしまって、飛び上がったのも虚しく強烈な衝撃が走る。

\*

――男は術中に陥ることなく自動車に轢かれて死亡した。

私は前回の車に轢かれるように仕向けた後は何もしていない。信号の向こう側では悪魔のやつも予想外だ、という顔している。

あいつらがやりそうなことを考えると、多分、警察官に追い詰められた男が窃盗犯を人質にして立てこもる、というシナリオだろう。

あの男は――天使にも悪魔にも従わなかった。

なんという自我だ。とんでもない人間である。

そして、神が決めた寿命、つまり、私たち天使の術により死亡した訳でもなく、悪魔の所業により悪事の末に死んだ訳でもない人間は――幽霊になる。

\*

死んでいる。

ああ、いや、うん？

生きているのか？

あれ？

いや、死んでいるなら多分考えることもできないんだろうけれど、今は考えることができている。

それで、目の前に鏡でよく見る顔の左右対称なやつが血まみれで死んでいる。いや、死んでいるように見える。

これって、僕だろ？

……誰か教えてくれ。

救急車がやって来た。さっき声をあげてくれたお婆さんが泣き崩れている。

——ああ、死んだんだな。

そして僕は、幽霊にでもなったんだ。

\*

自分が一応救急車で運ばれていくところを見送った。

特に何か感じることもなかった。よく考えたんだ。僕は自分の正義を貫きたいと思っていたんだけど、そもそも、貫きたい正義なんてなかったんだ。

気分次第で悪そうなことを悪にして、やっつけていただけだ。

僕は死んで気づいた。

——やりたいことがないことを。

そして——なぜか地縛霊になっていることを。

普通は何か恨めしいことがあるから幽霊になるんじゃないのか。どうしてこんな横断歩道の地縛霊になんてならないといけないんだ。死ぬんだったら地獄に行った方がまだマシだ。その方が面白いし、贖罪だってそう悪いことじゃないと思う。

でも、僕はここから動けない地縛霊になってしまった。

僕は一体、何がしたいんだ？

\*

一日経過した。家族は来ない。

子どもじゃないけれど、不良だった青年が善行をした直後に死んだということで、ニュースになったんだろう。結構な献花が置かれた。

僕の心はあまり動かなかった。ただの気まぐれだろう。そりゃ全く悲しくないかということそん

なこともないかもしれないけれど、大したことじゃない。

「申し訳ない……申し訳ない……」

この人が来るまでの話だ。

ハンドバックを盗まれたお婆ちゃんが数珠を持って泣きじゃくっているんだ。

「申し訳ない……申し訳ない……」

やめてくれ。そんなに泣かないでくれ。

いや、悪いのはまず犯人だし、百歩譲っても轢いた運転手だし、千歩譲っても警察ってところだって。

いやいや。

いやいやいや。

だから、だから泣かないでくれ。

三日経過した。

お婆ちゃんは今日も拜んで泣いてくれている。

「申し訳ない……申し訳ない……」

僕は――僕は死んで当然の人間なんだ。

だから、もう泣かないでくれ。

僕の為に泣く必要はない。

誰か――誰か――

おい――

おい！

おい、誰か一人くらいこの声が聞こえるやつはいねえのか。

これ以上この罪のない人を僕の目の前で泣かせるな。

天使でも何でもいいとつとと出て来い。

これが僕に対する罰とでも言うのか――

\*

風がどこかで舞った気がした。

「それは違う。君は確実に正しいことをして死んだ。それが今までの全ての贖罪になっていないことが残念だが」

「そうか。じゃあ、しょうがねえか。って、そんな訳ないだろ。僕はこのままでいい。だから――」

「だから、あの人をもう泣かせないでくれ、ということか」

「その通りだ」

「実は君に残された選択肢は二つしかない。一つはあのお婆さんを助けて、自分が消滅することを良しとするか、もう一つは——お婆さんを見殺しにして生き返るか。ちなみにその答えを出すまでの制限時間は二十秒だ」

はあ！？

トラックが泣いているお婆さんの方へ突っ込んで来そうなことがわかる——



\*

僕は迷うことなくお婆さんを助けた。

悪魔の悲壮な叫び声と神様の笑った声が聞こえた気がした。

\*

悪魔は今までの僕の経歴からもっと凶悪なことをしてくれるんじゃないだろうか、と期待していたのかもしれないんだけど、そもそも、結果は決まりきっていて、生きていても何もやりたいことがないということに気づいていたんだ。

自分の薄っぺらさを教えてくれたお婆さんが死にそうになっているというのに、助けないなんてどうかしている。

やりたいことがないなら、せめて人の役に立って死にたい。

自然なことだ。

僕はこれで最期まで自分を貫くことができたと思っている。

\*

私は天使である。

しかし、人間が私たちを正確に感知できるとは限らない。

彼に話しかけたのは誰だったのだろうか。

天使か悪魔か、それとも神か。

いずれにせよ、彼は最期の審判に合格した。

天国行きだ。